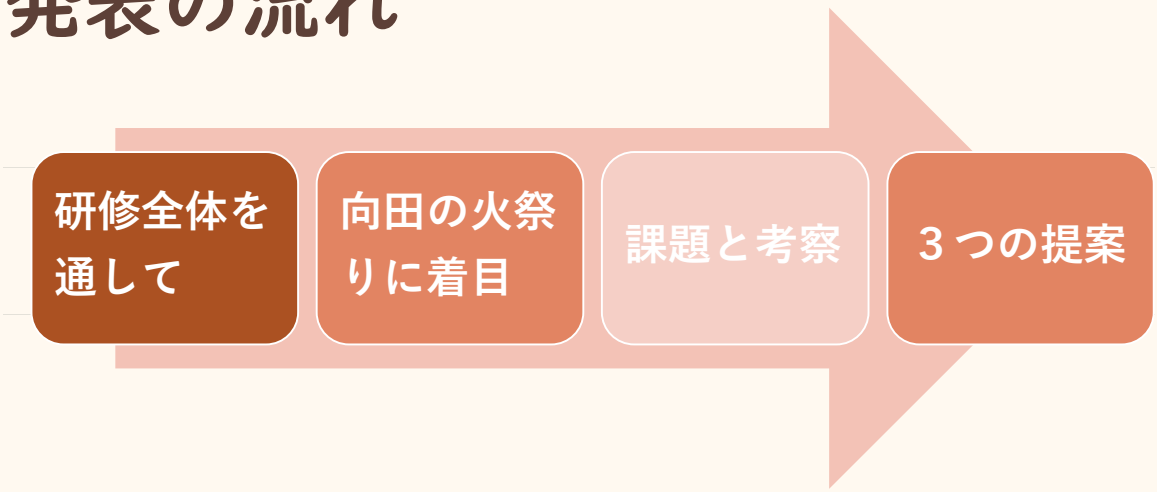
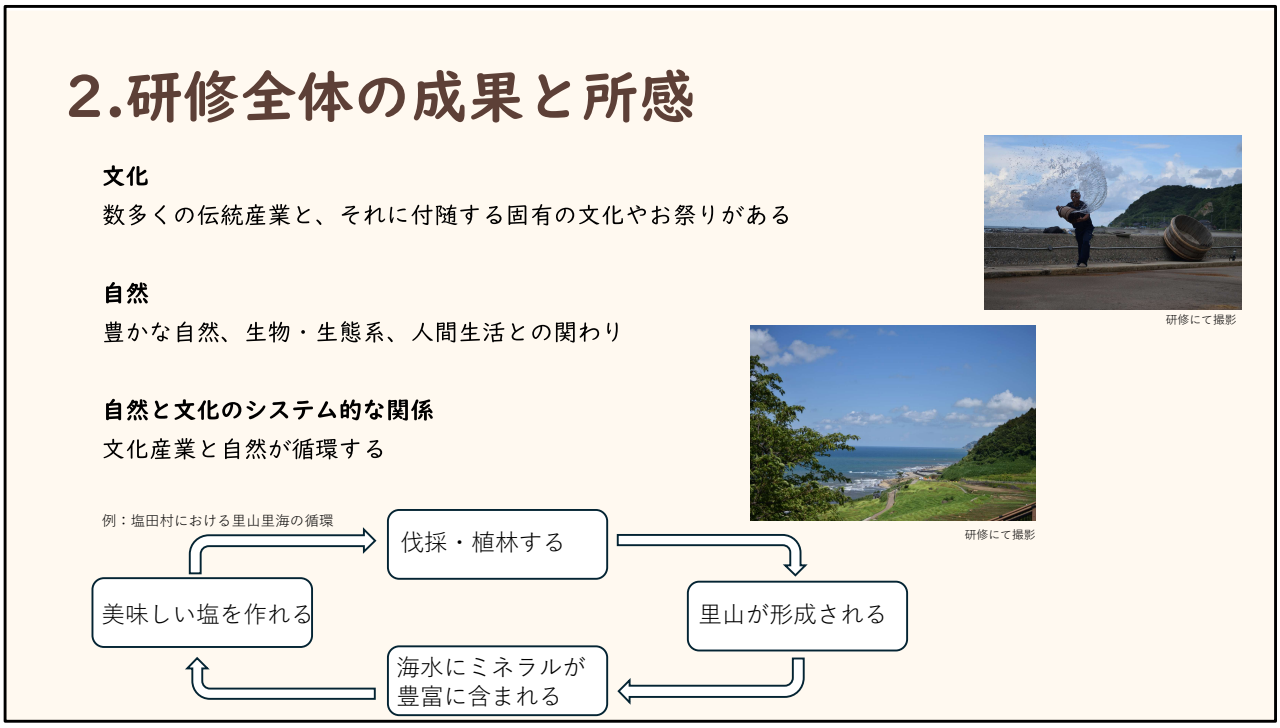
観光化されていない伝統文化を どう未来に継承するか

栢原歩磨　田中龍生　広富愛奈

発表の流れ



私たちの班は、能登町向田の火祭りに注目して考えました。



まずは今回の研修全体について総括したいと思います。

まず私たちは能登半島にはたくさんの文化があることを知りました。

例えば、漆塗り、花嫁のれん、建具、日本酒、醤油、塩、その他の食糧加工品など、その数は枚挙にいとまがありません。

そして能登半島には素晴らしい自然が備わっていることも感じました。
それは里山里海にはじまり、今回は掘り下げられなかったが生物多様性にも通じています。

そして肝心なのは、それぞれの自然に人の手が入ることです。
たとえば木材業は木を切りますが、それによって里山が形成されて、自然にも人間界にも還元されます。
製塩業では薪木のために伐採を行いそこから里山が形成されますが、その里山から染み出す栄養分が里海に溜まることで、ミネラル豊富な海水になります。その海水をもとに塩を作ることで、よりおいしい塩が作れるのです。

このような、能登半島にある自然造形と、それを活かした人間の営みが織りなす循環が、ほかの地域ではそうは見られない特徴であると考えました。

3.研修を通して感じた全体の課題

担い手不足
人口の減少、若者の流出、高齢化

施設・資金の目途
震災の影響、外部からの助っ人や移住希望者に対する受け入れ態勢、資金の集め方

文化や風土の特色の理解
地域や立場による認識の違い、意見の集約方法、知名度、重要性やアピールポイント

つぎに研修を通して感じた課題についてです。

まずは担い手の不足です。これは人口の減少だけでなく、若者の流出、さらに地域住民の高齢化などが挙げられます。
能登半島の文化や産業は、そこに住んでいる人が生み出すものです。基盤である人材が失われてしまうことは、その地域の生産性が下がるということだけではなく、地域のブランドの価値も下がってしまうということにつながるのではないかと思いました。

つぎに施設や資金の目途です。
震災の影響もあり、能登半島地域では居住環境の受け入れ態勢をもっと整えていく必要があると感じました。それは住民の方やもともと住んでいた方々が帰ってくるためにもそうだし、他の地域から移住してきたいと考えている人たちに対してもそうです。
このことについて考えるときに、施設を用意するための資金をどのようにして調達するのが良いのか、また、誰が主導で施策をすすめるべきなのかは重要なポイントではないかと思いました。
私たちとしては、地元の人が先頭に立って行っていくのが理想なのではないかと思います。

そして、能登半島の文化や風土の理解度を高めていくことの重要性をより強く認識しました。
沢山の人のお話を伺う中で、これからの創造的復興のビジョンを決めていくには小さな声でも丁寧に拾い上げていきたいと思いました。だからこそ、当事者の人たちが主導で復興を進めていくことが最も理想的だと思いました。
それでいて、能登半島の現状についての認識の違いを感じる場面も幾度かありました。
能登の人、金沢の人、石川県以外の人など、また世代によっても、震災の影響を重大視しているかそうでないのか、能登半島の魅力を知っているのかそうでないのかはかなり開きがあると思います。
とくに若者層では地震の影響を懸念していて関心がある人は多いが、文化や自然の魅力はまだまだ浸透させる余地があると思いました。

３.研修を通して得た発見

「なにを変えるべきで、なにを残すべきか？」

谷川醸造さん
→能登半島以外の市場も視野に入れた商品開発

ノトハハソさん
→伝統産業を継承していくための経営の柔軟性

IFAD
→当事者と援助機構、行政の連携の在り方

研修にて撮影

今回の研修では、純粋に魅力的だと思ったり、モデルにできるようなケースの発見もありました。

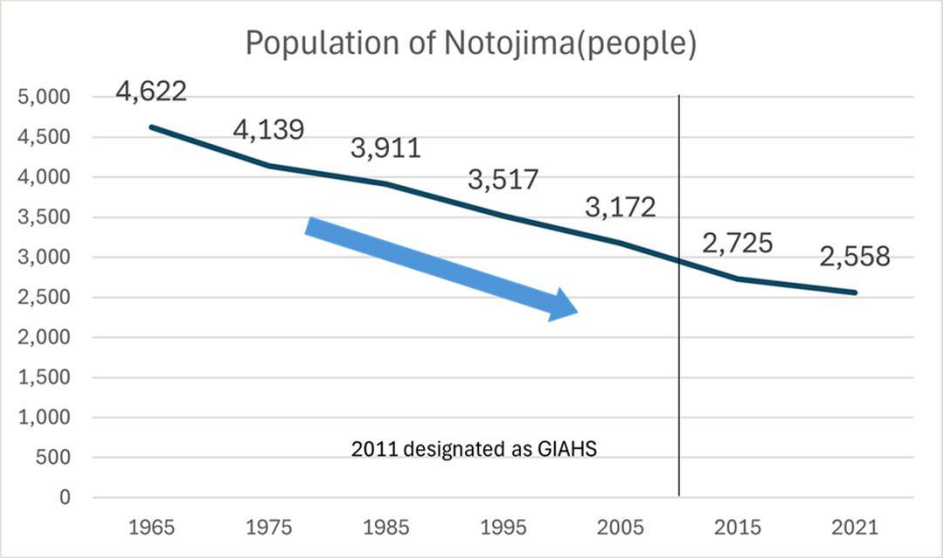
ひとつは谷川醸造さんの味に対する工夫やブランドマーケティングです。
わたしはこれまで、能登半島の地産品は地元を市場としているものとばかり思っていました。
谷川醸造さんではこれまでの会社の歴史も踏まえつつ、東京などにも味を少し変えて商品を売り出したり、自社のグッズなども出したりと、規定に枠にとらわれない挑戦をしていると感じました。

このような柔軟な経営姿勢はノトハハソさんでも感じました。
ノトハハソさんでは震災で火窯が損傷しましたが、まずは製炭業を途絶えさせないということで、伝統的な窯を復元するのではなく、維持管理のしやすい現代的な窯に置き換えました。もちろんいつかはかつてのように窯を復元して炭づくりを再開したいとのことでしたが、このように何を変えて、何を残すべきかという問いは、我々の班のテーマにも通じるところがあると感じました。

そしてＩＦＡＤでは、地元の人と行政と支援団体とが、どのようにして関わっていくのが良いかを考えるヒントをもらいました。
国連の機関であるＩＦＡＤでは、現地に入って固有の文化を持つ人たちと交流していく際に、地元の人の意見を最も尊重しつつ、それぞれの長が会して意見交換する機会と場所を設けているとのことでした。
これは、地元の人主導で、様々な機関と協力しつつ復興を目指そうとする我々のモデルとできるのではないかと思いました。

ここからは、向田(こうだ)の火祭りに着目しながら、お話していきます。

4.能登島の人口推移



ご覧の通り、現在、能登島の人口はどんどん減少しています。

５.向田の火祭りの「魅力」（仮説）

「本物感」
地元の人がメインで関わり、生活の一部として息づいている純粋さ

「神秘感」
お祭りの成り立ちや意味にフォーカスしており、観光地化された祭りにはない厳かさ

「祈りの継承」
豊漁・豊作祈願という、文化の根幹にある「祈り」がそのままの形で継承

「GIAHSとの関連」
農・自然・人の循環という、世界農業遺産の理念と直結した持続可能な生活文化

ここで、向田の火祭りの「魅力」について、我々の仮説ですが、お話させてください。
大きく、４つの魅力があると考えております。

１つ目は「本物感」
このお祭りは、地元の方々がメインで関わっており、生活の一部として息づいている、という純粋さがあります。

２つ目は「神秘感」
お祭りの成り立ちや意味にフォーカスしており、観光地化された祭りにはない、厳かさがあります。

３つ目は「祈りの継承」
豊漁・豊作祈願という、文化の根幹にある「祈り」がそのままの形で継承されています。

最後は、「GIAHS(ジアス)との関連」
農(業)・自然・人の循環という、世界農業遺産の理念と直結した持続可能な生活文化が伺えます。

ここで、お祭り文化の課題について考えたいです。大きく、２つの課題があると思います。

ひとつは、**担い手不足**です。
先程も申し上げましたように、年々人口は減少しており、**地域の若者流出や高齢化**が進んでいます。その為、**祭りの準備や運営、神事の担い手の減少**が課題となります。

もうひとつは、**非観光化による存続の難しさ**です。
経済的支援が得にくく、活動の維持費確保の困難である為、お祭りの**存続が難しい**ことが課題です。

ここで、観光化をする、しないとでの、メリット・デメリットを比較します。

観光化をしない場合のメリットとしては、
・地元住民主体で「本物感」が強いこと。
・祈り・共同体性・自然との関わりが保存されること。
・伝統文化としての純粋性が高いこと。
といったものが挙げられます。

ただし、デメリットとして、
・担い手不足、住民の高齢化。
・維持費、人手、といった、存続リソース不足。
・外部資源・支援が少ない。
という課題も挙げられます。

それらに対して、観光化した時のメリットとしては、
・観光客誘致による地域活性化。
・経済効果が大きいこと。
・継続的に祭りを開催しやすい。
ことなどが挙げられますが、

反対にデメリットとして、
・伝統的・宗教的な本質が薄れる可能性。
・観光用に改変された要素が増えること。
・住民主体の共同体性が弱まる可能性。
などが言えます。

８.本質的な課題（考察）

観光化すれば

存続はしやすいが、形式のみの存続で祈りの意味を失う（徐々に薄れる）

観光化しなければ

本質は守れるが、担い手不足やリソース不足により消滅するリスクが非常に高い

能登の文化は**観光化されていないからこそ本質が守られている**

このジレンマの中で、どうすれば**“本質を守ったまま未来に継承できるか”？**

ここから、本質的な課題を考察します。

観光化すれば、存続はしやすいですが、形式のみの存続で祈りの意味を失う、あるいは、徐々に薄れることになる、と考えられます。

それに対し、

観光化しなければ
本質は守れるが、担い手不足やリソース不足により消滅するリスクが非常に高くなります。

ここから、
能登の文化は観光化されていないからこそ本質が守られている、と言えます。

(どんな物事にも言えることですが、
守りたいものを守るためには、時には変化も必要です。しかし、守ることを意識しすぎると、本質を見失う危険性も、あるのかもしれません。
今回の研修では、その希望や苦悩を間近で見て、お話を聴くことが多かったように感じます。)

このジレンマの中で、どうすれば“本質を守ったまま未来に継承できるのでしょうか？

9.3つ提案

①インスタグラム開設

②プラットフォーム形成

③大学・学生団体との連携

私たちのテーマである「観光化されていない伝統をどう未来に継承するか」の結論について、私たちは、一部の観光化で共感と理解を広げる発信によって外部を巻き込むとしました。ただこの共感と理解というのは、情報を受け取った人だけではなく、能登の方たちも含まれます。地元の人の理解なしに進めるべきではないと考えます。

そこで、今回3つの案を提案いたします。

提案①
：インスタグラム開設

- **写真・動画を投稿**できる
- **ストーリーズ**（24時間で消える短い投稿）
- **フォロー**すると投稿がタイムラインに流れる
- **いいね・コメント**で交流できる
- **ハッシュタグ**（#）で同じ興味の人とつながりやすい
- お店・観光地探しにも使われる

とてもシンプルで、「見て楽しむ」「発信する」がどちらもできるSNS。

（Canvaを元に製作）

インスタグラム　2つの目的

【１】魅力の視覚化（認知拡大）

火祭りの壮大さや美しさを
「絶景」として発信

【２】本質の発信（理解促進）

根幹にある祈りの非観光化の背景
→深い理解と共感を促し、事前知識を提供
→「参加」の質向上

まず、インスタグラムについてです。

インスタグラムを見た所、向田の火祭りの専用アカウントを見受けられませんでした。なので、発信の手段の一つとしてインスタグラムを提案します。

インスタグラムでの発信は2つの目的があります。

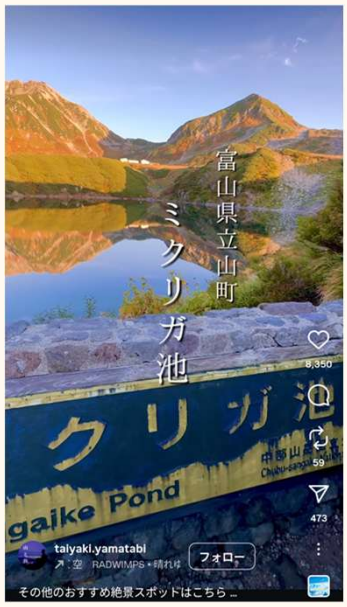
1つ目は、魅力の視覚化による認知拡大です。
お祭りの壮大さや美しさをこのような絶景として発信します。

2つ目は、本質の発信による理解促進です。
その根幹にある意味や豊漁、豊作を占うものであることを発信することで、深い理解と共感を促します。そして、これを見てお祭りに参加してくれた人は事前知識がある状態なので、その参加の質向上を狙います。

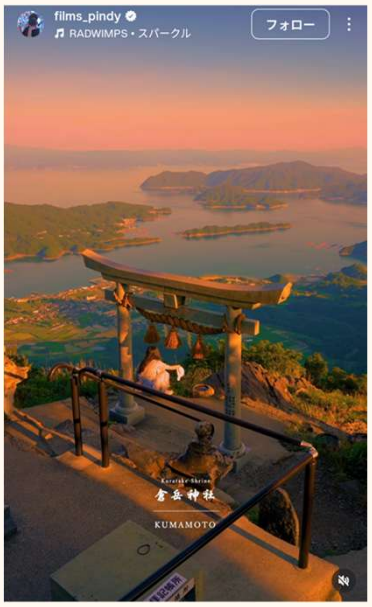
絶景を映像で紹介する Instagram(リール投稿) の事例

★リールの特徴

- **縦長の短い動画**を投稿できる
- **音楽・文字・エフェクト**を重ねて編集できる
- フォロワー以外の人にも届きやすく、**拡散力が高い**



(引用元)taiyaki.yamatabbi



(引用元)films_pindy

魅力の視覚化（認知拡大）はリール投稿

【１】魅力の視覚化（認知拡大）

火祭りの壮大さや美しさを

「絶景」として発信

（https://www.maruichi-gp.co.jp/_system/wp-content/uploads/2023/07/1690790038944-768x1024.jpg，Canvaを元に製作）

基本的な投稿はどちらも、より多くの人の目に留まる動画形式にし、

①魅力の視覚化（認知拡大）については、フォロワー以外の人にも届きやすく、拡散力の高いリール投稿を使用し、

本質の発信（理解促進）は通常投稿（フィード投稿）

【２】本質の発信（理解促進）

根幹にある祈りの非観光化の背景

→深い理解と共感を促し、事前知識を提供

→「参加」の質向上

（https://www.hot-ishikawa.jp/lsc/upfile/article/0000/0423/423_1_m.jpg，Canvaを元に製作）

②本質の発信（理解促進）については、伝えたいことを文章でわかりやすく伝えられる通常投稿でもいいかなと考えています。

提案②：プラットフォーム形成

マツリンク

担い手不足に悩む地方の祭りと、祭り好きの若者を結びつけるプラットフォーム。

祭りお助け隊

県が創設したボランティア制度を活用し、外部からの人手を確保する。

地域おこし協力隊

七尾市などの事例を参考に、行政と連携したサポート体制を構築する。

プラットフォーム形成については、調べたところすでにいくつか存在していたので
今回は紹介だけにさせていただきます。

提案③：大学・学生団体との連携

背景：途切れる「個人」

担い手不足は深刻化
地域づくりに関心を持つ学生は多い
個人単位の関わりは4年で途切れる

提案：「団体」との協力

個人ではなく「団体」とつなぐ
「地域実習」として準備段階から“担い手の一部”として関与

効果：持続的な世代交代

4年ごとの交代サイクルを利用
→継続的に確保
学生のSNS発信力も活用
「外から支える担い手」を実現

最後に大学、学生団体との連携です。これは、僕たち学生ならではのメリットを生かせるものであると思います。

◆背景
能登町の人口減少・高齢化により、担い手不足が深刻化している。

一方で、地域づくりや伝統文化に関心を持つ大学生は多い（例：金沢大学AERUなど）。

ただし、個人単位の関わりは4年で途切れるという課題がある。

◆提案内容
個人ではなく「団体」とのつながりを定常化する。
 金沢には積極的に地域貢献を行うボランティアサークルもある。SFT，金ハビ等

学生は「準備段階から関わる」ことを基本とし、ただの観光参加ではなく“担い手の一部”として関与。

◆狙い・効果
世代交代のサイクル（4年ごと）を逆に利用して、若者との接点を持続的に確保できる。

大学生の視点・SNS発信力を活かして、外部への共感的な発信も同時に進められる。

“地域の外から支える地元の担い手”という新しい形を実現できる。

まとめ

能登の文化は**観光化されていないからこそ**
本質が守られている
⇩
このジレンマの中で、
どうすれば**“本質を守ったまま未来に継承できるか”？**
⇩
【３つの提案】
①インスタグラム開設
②プラットフォーム形成
③大学・学生団体との連携

伝統文化グループは、
「観光化されていない伝統文化をどう未来に継承するか」をテーマに、
①インスタグラム開設、②プラットフォーム形成、③大学・学生団体との連携
という３つの提案をしました。

このようにして、能登の文化継承に少しでも役立てると嬉しく思います。

ご清聴ありがとうございました